

## 二〇、森林と海と酸素の関係

(ページ『自分の身の回りの知らない事』参照)

今の日本中をズーツと見ていくと、近海の魚が段々いなくなってきたているんですね。海流が変わって何処かに行ってしまうんですね——と、思いきや、そうじゃないですね。

今、岬だとか、海岸べりにズーツと道路や観光道路が出来ますね。森林の中に道を通す。その為に木を伐採していくんですよ。

いいですか……そうすると、魚がいなくなってしまう。そうしたら、

「それとこれと、何の関係があるんですか？木と魚が何の関係があるんですか？」

と人は言うでしょう。——これは、大いにありますね。

例えば、海岸べりの森林を開発して道路を造りますね。森林というのは、雨が降つ

たら土に染み込む。木というのは、根があつて、ザーツと水を吸いますよね。

いいですか……そして土に染みこんだ残りの水は、今度はズーツと土の下を通つて海の方へと染み出す。

そこで、この雨水と潮水が混ざり合つて、丁度良い濃度の処で、近海の魚は産卵するようになってるんですよ。そういうふうになつています。

ですから道路を造ると、海にザーツと水が流れ込んでしまう。魚の産卵場所が無くなってしまふ。

それから、今何処でも山の中にも道路を造つて、アスファルトで固めてしまひますね。そうしたら、どうなるんでしょう。——道路を挟んで両側の森林は全然別のものになつてしまふんですよ。動物も昆虫も、鳥までも行き来が出来なくなつてくる。

木も、右と左で全然違うものになる。

森林も生き物も、全てが共同体なんですよ。全部、関連している訳です。ね。ところが、そんな事は、お構いなしに道路を造っていく。

こういう事を、気が付かない役人の人がいたら、教えてあげればいいですよ。みんな、この自然のものを別々に考えている。こんな事、誰も知らない。みんな段々分からなくなってきました。こういう事、分からないですよ。考えないですよ。

という事は、人間が自然に対して、奢り過ぎだということですよ。

空気中の酸素は二二%——この二二%の酸素の三分の一は、大体、南方の熱帯雨林から出ている訳です。

ところが、その三分の一というその密林を、実は今、半分位切ってしまった訳です。

切ったら何処へ持っていくんでしょうか？ ——その七〇%が日本が使っているですって——。彼等は、日本人の事を木食い虫と言っていますよ。(笑)

何にそんなに使うんでしょうか？ ——家が必要だから……と、もう日本人は分か

らないですね。

皆さん知っているように、アマゾンの方では、どんどん原生林を壊して畑を作る。あの辺の人は、街にいても職が無いから、「あんた、あっちに行って開墾しなさい」と言われて政府でやらせる。

「まだまだ大丈夫だから、開墾しなさい」と畑を作るでしょう。二、三回植えて、土が駄目になったら、今度は他の土地の木を切って、またそこに畑を作る。切った後は、木を植えない。こんな太い木を切って、その後には今度は苗を植えても、一年や二年じや大きくならないですよ。

毎年、物凄い量の森林が、この地球上から無くなっているんですよ。

酸素の事もみんな分からないんじゃないでしょうか。ですから空気中の酸素の量が偏ってくる。酸素は多くても少なくても、人間は息がつけなくなってくる。

それじゃ、どうやってこれを保っているんですか？ ——人間が二酸化炭素を出して、それを木が吸う。そして、木が酸素を出してくれる。しかしこのままでは、何時までも、この二一%というのは保つことが出来ないんですよ。多くなったり、少なく

なったりする。

そうしたら、どうなりますか？ —— そうしたら、生き物は全部駄目になる。そうしたら、どうするんですか？ —— 実は、この海の水が、何時もこの二一％の酸素の量を調整ちようせいしているんですね。調和ちやうわしている。全部繋がつなっているんですよ。

いいですか……私達は、そういう事を分かなければ駄目だということですよ。今の文明で、みんながこういう肝心かんじんな事を忘れていってしまう。

これじゃ、人間どうなるんですか？ —— こんな事を言ったら、「どうかなったとしても、私はもう、その頃はいないからいゝや」と思うけれども、次に直ぐ、またこの世に出て来るんですよ、自分の魂のグループが——。グループであっても、自分なんですよ。——これがまた、分からないですね。

私達は、一人でもいいですから、こういう事を知って、やはり自分というものを、どのようにしていったらよいか——。「私一人でもいいからやろう」という人が出て来なかつたら、絶対におかしくなりますよ。そんなに時間が経たたないうちにおかしくなりますよ。——こういう事を仏さんほとけが出て来られて、

「こうなったら、こうなりますよ」

と話していかれた訳です。これから先どうなるか、ちゃんと分かっているんですね。私達は、そういう中を永遠に生かされている。生きているんじゃないんですよ。生かされているんですよ。

一九八九年五月